



■ 出会いの joy !

※本稿は令和6年度『三高祭パンフレット』（令和6年8月27日発行）に寄稿したものです。

「101回目の青春したい宣言」—これが今年の学園祭のテーマです。大正13（1924）年に開校した本校は、今年4月17日に開校100周年を迎えました。開校したその年の新生55名にとっての青春が、本校生にとっての“1回目の青春”。今年はそのから数えて“101回目の青春”となります。歴史をさかのぼると、これまでの100回それぞれに様々な青春があったことと思います。

青春は、時にアオハルと読まれることもありますが、青い春とは一体どんな意味なのでしょう。古代中国の五行思想では「春・夏・秋・冬」を「青・朱・白・黒（玄）」という4色で表しています。これらを組み合わせたものが、青春（せいしゅん）・朱夏（しゅか）・白秋（はくしゅう）・玄冬（げんとう）です。この4つは人生の各段階にも当てはめられていて、若さあふれる時期が「青春」、働き盛りの時期が「朱夏」、落ち着きを増した時期が「白秋」、そして人生の齢を重ねた時期が「玄冬」となります。「青春」とは、新たな芽吹きで時期であり若々しく元気で力のみなぎった時期といえるでしょう。



現在の私は、この色表現からすると“白”から“黒”に向かう“グレー”といったところでしょうか。その“グレー”な私にも“青”の時期はありました。高校3年間を今年の学園祭のテーマ風に表現すると「57回目の青春」（学園祭テーマ：「翔け未来へ！三高生」）、「58回目の青春」（学園祭テーマ：「つかめ！キラリ青春」）、「59回目の青春」（学園祭テーマ：「語ろう明日を、組もうスクラムを。」）です。3年間それぞれに思い出はありますが、高校入学後最初となる1年生の時の学園祭は強く印象に残っています。学園祭は現在と同じように学年を超えた縦割りの色編成であったため、2・3年生の先輩方との多くの出会いがありました。先輩方は、1年生から見るとかなり大人に見えたものです。体育祭で披露するパフォーマンスの練習では、なぜか早稲田大学と慶応義塾大学の応援歌練習を割とハードにさせられたため、今でも両校の応援歌はフルコーラスで歌えるほどですw

その「57回目の青春」を特集した当時の生徒会機関誌『雲南』（復刊第14号）を紐解くと「学園祭で得たもの感じたものは？」のアンケート結果が目にとまりました。どの学年でも「友情」や「団結」とともに「青春」の2文字が並んでいます。特集記事では、当時2年生のSさんが学園祭についてこう記しています。

「9月5日、6日と順調に始まった文化祭。誰もが拍手を送り、笑い声を響かせた。そして、最終日を迎えるはずだった7日、あいにくの雨に見舞われ順延…。諦めきれぬ思いで空を見上げては校庭整備にあたる人・人・人。

そしてあくる日、湿ったグラウンドで行われた体育祭。重く垂れた雲の間から時々覗く太陽の光を、誰もが笑顔で迎えた。走って、歌って、

◎ 学園祭で得たもの感じたものは？

	友情	団結	青春	学校生活	協力	自由
1年	27%	22%	16%	15%	14%	6%
2年	13%	24%	18%	19%	16%	11%
3年	25%	29%	16%	5%	22%	4%

声援し…。その日、私たちはひとつになれた。夕日に染まったグラウンドの中で肩を組み、みんなが歌い、喜び、そして泣いた…。

こうして大成功のうちに終えた学園祭。私は短い数日間ではあったが、いろいろなことを学んだ。ひとつのことを成し遂げようとする団結力、日頃言葉も交わさない人たちとの友情の広がり…。(中略) 私たちは夢や希望、喜びを体いっぱいに表示できること、そして、いつでも集まればひとつになれる団結と友情を、ひとりひとりが持っていることを忘れてはいけないと思う。」

当時、高校近くには「j o y !」という喫茶店がありました。そこから「出会いのj o y !」というフレーズも生まれました。

今年「101 回目の青春」の皆さんには、どんな出会いが待っているでしょうか？

三高生一人一人が1つになって青春の1ページに向かっていきましょう。